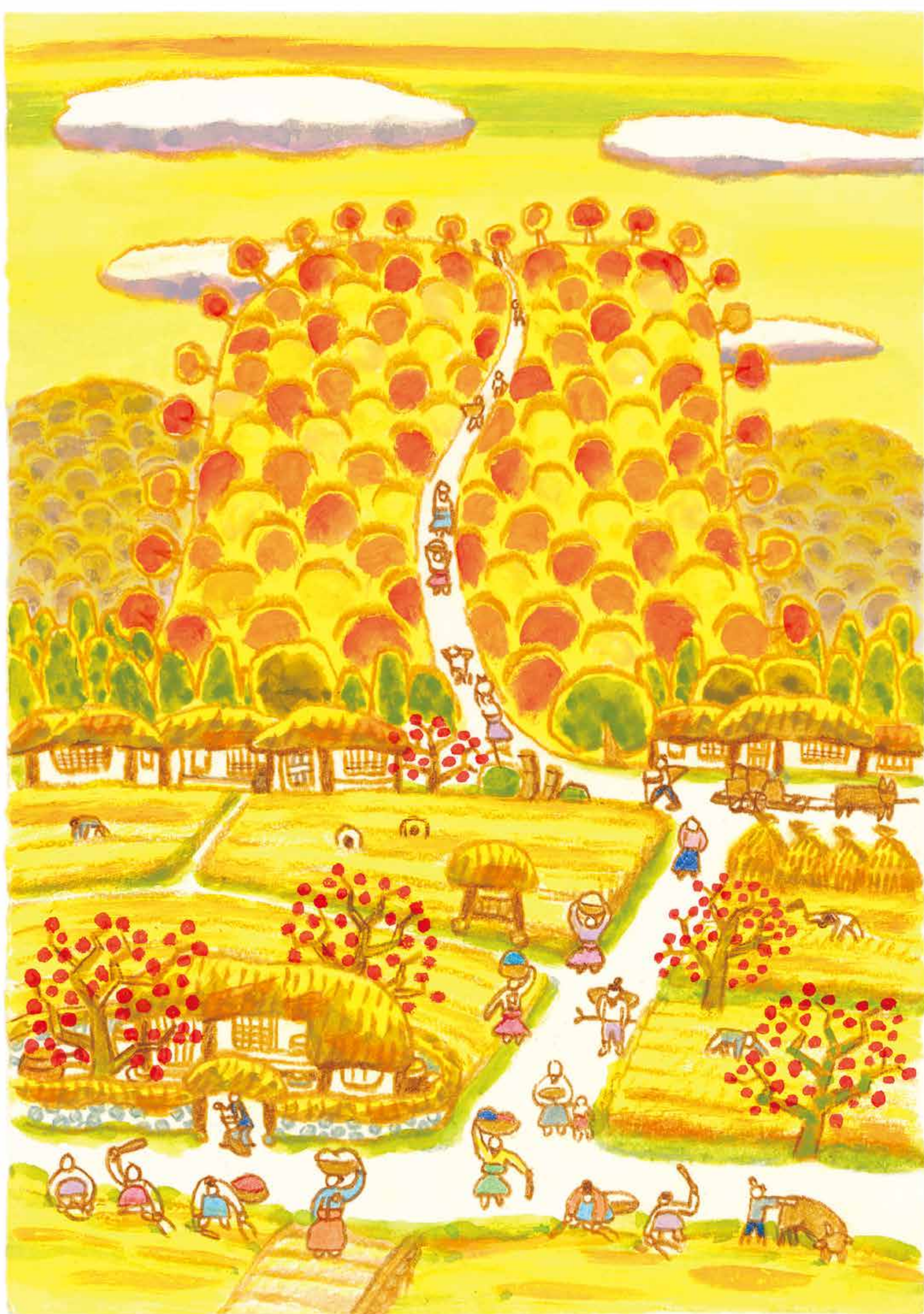


## 三年とうげ

李錦玉 作  
朴民宜 絵

あるところに、三年とうげとよばれるとうげがありました。  
あまり高くない、なだらかなとうげでした。  
春には、すみれ、たんぽぽ、ふでりんどう。とうげからふもとまでさきみだれました。れんげつつじのさくころは、だれだつてため息の出るほど、よいながめでした。  
秋には、かえて、がまずみ、ぬるでの葉。とうげからふもとまで美しく色づきました。白いすすきの光るころは、だれだつてため息の出るほど、よいながめでした。



三年とうげには、昔から、こんな言い伝えがありました。  
「三年とうげで 転ぶでない。  
三年とうげで 転んだならば、  
三年きりしか 生きられぬ。  
長生きしたけりや、  
転ぶでないぞ。  
三年とうげで 転んだならば、  
長生きしたくも 生きられぬ。」  
ですから、三年とうげをこえるときは、みんな、転ばないように、おそろおそろ歩きました。  
ある秋の日のことでした。一人のおじいさんが、となり村へ、反物を売りに行きました。そして、帰り道、三年とうげにさしかかりました。白いすすきの光るころでした。おじいさんは、こしを下ろしてひと息入れながら、美しいながめにうっとりしていました。しばらくして、  
「こうしちゃおれぬ。日がくれる。」  
おじいさんは、あわてて立ち上がると、  
「三年とうげで 転ぶでないぞ。  
三年とうげで 転んだならば、  
三年きりしか 生きられぬ。」  
と、足を急がせました。

お日様が西にかたむき、タやけ空がだんだん暗くなりました。



ところがたいへん。あんなに気をつけて歩いていたのに、おじいさんは、石につまずいて転んでしまいました。おじいさんは真つ青になり、がたがたふるえました。  
家にすつとんでいき、おばあさんにしがみつき、おいおいなきました。

「ああ、どうしよう、どうしよう。わしのじゅみょうは、あと三年じゃ。三年しか生きられぬのじゃあ。」

その日から、おじいさんは、ごはんも食べずに、ふとんにめぐりこみ、とうとう病氣になってしまいました。お医者をやぶやら、薬を飲ませるやら、おばあさんはつきつきりて看病しました。けれども、おじいさんの病氣はどんどん重くなるばかり。村の人たちもみんな心配しました。



そんなある日のこと、水車屋のトルトリが、みまいに來ました。「おいらの言うとおりにすれば、おじいさんの病氣はきつとなおるよ。」

「どうすればなおるんじや。」



おじいさんは、ふとんから顔を出しました。

「なおるとも。三年とうげで、もう一度転ぶんだよ。」

「ばかな。わしに、もっと早く死ねと言うのか。」

「そうじゃないんだよ。一度転ぶと、三年生きるんだろ。二度転べば六年、三度転べば九年、四度転べば十二年。このように、何度も転べば、ううんと長生きできるはずだよ。」

おじいさんは、しばらく考えていましたが、うなずきました。

「うん、なるほど、なるほど。」

そして、ふとんからはね起きると、三年とうげに行き、わざとひっくり返り、転びました。

このときです。ぬるでの木のかげから、おもしろい歌が聞こえてきました。

「えいやら えいやら えいやらや。  
一べん転べば 三年で、  
十べん転べば 三十年、  
百べん転べば 三百年。  
こけて 転んで ひざついて、  
しりもちついて でんぐり返り、  
長生きするとは、こりや めでたい。」  
おじいさんは、すっかりうれしくなりました。



ころりん、ころりん、  
すってんころり、  
べったんころりん、  
ひよいころ、ころりん、  
転びました。あんまりうれしくなつたので、しまいに、とうげからふもとまで、ころころころりん、転がり落ちてしまいました。そして、けるけるけるとした顔をして、  
「もう、わしの病氣はなおった。百年も、二百年も、長生きができるわい。」  
と、にこにこわらいました。

こうして、おじいさんは、すっかり元気になり、おばあさんと二人なかよく、幸せに、長生きしたということです。

ところで、三年とうげのぬるでの木のかげで、  
「えいやら えいやら えいやらや。  
一べん転べば 三年で、  
十べん転べば 三十年、  
百べん転べば 三百年。  
こけて 転んで ひざついて、  
しりもちついて でんぐり返り、  
長生きするとは、こりや めでたい。」  
と歌ったのは、だれだつたのでしょうね。

